

目次

巻頭言：小児外科医と医の尺度	1
教室人事	3
教室員のひとこと	5
診療の集計	
1. 外来および入院	10
2. 手術	11
研究業績	
1. 論文発表	12
2. 学会・研究会への参加	13
3. 研究助成	17
4. 学位	17
教育関連の活動	
1. 学生実習	18
2. 講演・講義	18
3. セミナーの開催	18
4. 小児外科・病理カンファレンス	19
5. 抄読会	20
その他	21
編集後記	21

* 表紙の絵は子どもたちの作品を素材に構成したものです。

巻頭言： 小児外科医と医の尺度

獨協医科大学越谷病院

小児外科教授 池田 均



よく医者は生涯、勉強であるという。これは日々、膨大となる医学知識に追いつき、新たに開発される医療技術を身につけるためには、ごく当然の帰結であろう。しかし、同時に私たち医療者は常にアンテナを張り世の変化に敏感である必要がある。

なぜなら医の倫理が時代によって変化するからである。臓器移植や最近の生殖医療の報道に例を引くまでもなく、医にまつわる倫理は時代や社会とともに時に大きく変化する。

私が医者になったばかりの頃、些か古い教科書ではあったが、ある小児外科の成書に先天奇形の一つである“総排泄腔外反症(cloacal exstrophy)(膀胱腸裂とも呼ぶ)”では新生児期を乗り切ってもその後の正常な直腸膀胱機能や下肢の運動機能を期待し得ないため、治療の対象とはすべきでないと記載されていた。しかし、現在は勿論、当時でもわが国の小児外科医はこの難しい先天奇形を持って生まれた子どもを、何とか大きく成長させ社会に適応させたいと全力を傾けており、治療の対象にならないなどと言う人は誰一人いなかった。事実、この疾患を生まれ持った多くの子どもたちが複数のハンディを負いながらも立派に社会生活を送っている。

私たち医療者の倫理的判断の尺度はすなわち、しばしば見直しと基準合わせが必要ということである。日常診療では日々、この尺度を用いて病名の告知を行ったり行わなかったり、また治療や手術の適応の判断の助けとしているからである。医療者や医療チームが基準合わせをし、常にこれを確認しておくことは独断や専行を防ぐ上でも極めて重要なことである。時々、話題となる医師による安楽死事件や、最近、報道された経験の浅い医師による腹腔鏡事故などはこの基準合わせを忘れた結果と言っても過言ではないだろう。

小児外科医として医療、特に先天奇形を有する新生児の医療に携わっていると医療する側の倫理と現実が相容れないという場面に遭遇することもある。二十余年の小児外科医としての経験の中で治療を拒否されたことが二回あった。これも治療する者にとってはつらい試練で、手術をすれば助けることのできる患児を親権者の拒否ゆえに手を出せずに見守るしかなく、己の尺度を大きく曲げてみたが目の前の現実と妥協することはできなかった。一度は二ヒルを装って無力感に浸ったが、二度目は正義感に突き上げられて司法に駆け込んだ。いずれも結果は失敗であった。産科医が気を利かしてくれればこんなことにはならなかったのに、と言った父親の顔が忘れられない。

そういえば身近な所にも基準合わせの必要なことがあった。当科では特殊外来の一つに「出生前診断」外来を設けている。これは妊娠中の超音波検査で見つかった胎児の外科的異常に対して産科と緊密に連絡を取り合い、母体と生まれてくるこどもの双方に万全の体制で臨みたいとの思いで、その窓口として設けたものである。主に両親と家族への説明や相談に使用しているが、これを開設した当初、私たちが出生前診断を行うのではとの誤解からクレームを受けたことがあった。つまり、出生前の遺伝子診断やそれに関連した人工中絶などを連想させる危険があり、事実、そうしてしまったというのである。言われてみればそれも尤もで、一部の人は「出生前診断」なる言葉に強いアレルギー反応を示すらしい。しかし、あくまでも胎児の小児外科的異常に対応するために設けた外来であり、他に適当な呼び名も見つからなかったため外来名はそのままにしてある。また、あえて誤解を解消したいとの意図から注釈を添えてホームページでも公開している。開設からすでに2年近くになるが、幸い新たなクレームや申し入れなどは今のところない。

私たち医療者の倫理的尺度をどのように時代や社会の中で、また医療チームや個人と基準合わせをしてずれのないものとして維持するか。そう難しいことではないだろう。考え、まとめ、発表するという学問に基本的な作業を怠らず、同時に常に情報公開しながら一般に理解を求める態度を忘れなければそう大きなずれを生じる心配はないと思うからである。一月に50人の赤んぼを取り上げていた産婆であった祖母は、お産が終わり帰ってくると必ず茶の間でその日の報告をしていた。今思うと、それが祖母にとってのカンファレンスであり、基準合わせで合ったような気がする。



教室人事

2003年3月31日、内田広夫講師と山本英輝学内助手が退職した。内田広夫君はさらなる小児外科の修練を目的に埼玉県立小児医療センター外科へ、また山本英輝君は小児がんの分子生物学的基礎研究をテーマに千葉県がんセンター生化学研究部へ移動となった。

4月1日、高安 肇講師、岡邨香織学内助手が採用となった。高安 肇君は東京大学小児外科からの派遣で同付属病院から移動、また岡邨香織君は群馬大学第一外科からの派遣で済世会前橋病院外科からの移動である。したがって、同日から常勤スタッフは池田、石丸、高安、藤野、岡邨の5名体制となった。さらに12月1日、大谷祐之君が東京大学小児外科からの派遣で都立広尾病院外科から移動となり、学内助手に採用となった。尚、藤野順子君は出産を控えた長期休暇中であったが、無事、双子の女兒を出産し、そのまま育児休暇に入った。

非常勤講師はこれまでどおり、群馬県立小児医療センター形成外科部長浜島昭人先生と社会保険船橋中央病院形成外科部長蓮見俊彰先生に形成外科の外来診療、手術、教育を担当していただいた。さらに4月1日から新たに群馬県立小児医療センター外科部長黒岩 実先生と埼玉県立小児医療センター外科内田広夫先生に非常勤講師に就任していただき、黒岩 実先生には鏡視下手術の教育を、また内田広夫先生には研究指導をお願いした。

木崎義行君は研修2年目を迎え、他科臨床研修として9月1日から麻醉科の研修を開始した。また小児科研修医の島村圭一君を1月1日から2月28日まで小児外科の研修に迎えた。



2003.12.2 病院前



2004.3.8 外来スタッフと



2004.3.5 研究室にて
長嶋美輝さん(教室秘書)と



2004.3.4 研究室にて
千年 絢さん(研究助手)と

教室員のひとこと

「2003 年を振り返って」

石丸由紀

2003 年を振り返ってみると、院内では病院機能評価を受けたことが、第一に挙げられる。病院機能評価を受けるに当たり、まず各部署の自己評価を行った。それらの項目について必要があれば改善を図り、また、各帳票も刷新、追加された。今まで考えたこともなかった、または当たり前だと思っていた事柄が文書化され、改めて患者の権利を重視するということだが、いかに手間がかかっても最重要であるということ再認識させられた。評価の当日、当病棟は必ず視察が来るということで、スタッフはかなり緊張していたようだが、比較的平穩に終了したようである。1月下旬に晴れて合格が通知された。このために準備段階から積極的に関わっていた高安先生、大変ご苦労さまでした。

2004 年 4 月には臨床研修医制度の改革が始まる。一昨年より当院でも研修医獲得を目指し、副院長の大蔵教授、救急医療科の池上教授を中心に魅力あるカリキュラム作りに取り組んできた。限られた期間内に厚生労働省の指針に沿って研修を行う臨床研修医のカリキュラムを作ることは、地味で忍耐の要る仕事である。実際に指導的立場となる医師たちの意識がなかなか上がらず、特に人数が少ない、または多忙な科では教育に関わる人手が足りないというのが本音であろう。また、この研修制度では2年間のスーパー・ローテーション形式となるため、今後2年間は自分たちの医局に新人スタッフが入局しないうえに、研修医にアルバイトをさせてはいけない。今まで毎年のように研修医が入局していた科や、外勤を多く抱える科では、給料の低い研修医に当直のアルバイトをさせ、生活の足しにしてきたところもあるであろうが、それができなくなるため、年齢の高いスタッフまで当直に駆り出されたり、アルバイトを断ることになる。新研修医制度では外勤先の一般病院や診療所も少なからず影響を受けることとなる。いよいよこの春から実際に施行されるこの制度。昨年来、病院機能評価のため書類仕事の増えた医師に、さらに負担増となるのだろうか。

医療制度の改革の中で、病院淘汰の流れともいってよい様々な変化が医療従事者を取り巻いている。この中でいかに利益を上げ、生き残っていくか。これらについては事務や部長会だけが考えればよいことではない。特に患者一人あたりの収益の低い小児医療では医師や看護師などスタッフ一人一人が意識していくべきことである。「どうせ同じだから」と選挙に行かなければ政局は変えられない、一票は小さくても沢山集まれば大きな力となるのと同じように。

最後になったが、今年度は2年間一緒に働いてきた内田先生と山本先生が異動となり、4月から高安先生と岡邨先生が赴任された。9月からは木崎研修医が麻酔科と消化器内科に口

ーテーションに出たが、12月からはさらに大谷先生が助手として加わった。入院数、手術数とも昨年より増加しており、非常に充実したスタッフでの診療を行うことができた。来年も躍進できることを祈りつつ本稿を終わりたい。

「Amazing Grace」

高安 肇

獨協医科大学にお世話になり一年がたとうとしています。この間支えてくださった病棟や外来などスタッフの皆様にあつく御礼を申し上げます。最近になり、ようやく肩のちからが抜けていくのを感じるようになってきました。「人事の谷間」となった秋は、平日の外来と病棟を1、2名の医師で切り盛りせざるを得ず、特に緊急対応に苦慮した場面も多々ありました。加齢現象でしょうか、昨年冬あたりより頭に白いものを見つけるようにもなりました。また私自身が小児外科医としても研修中の身であり、池田教授や石丸先生に色々とお教授いただきました。人員不足の中、岡邨先生、木崎先生はよく頑張ってくださいました。おかげさまで、厳しい昨今の医療環境の中、手術件数や外来件数が増加に転じた一年でもありました。

最近、現場において気になるのは、増加し煩雑化する手続きや書類の山です。この現象は全国的に少なからず問題視されており、雑誌や新聞でも取り上げられるようになってきました。本来は現場でのミスが減らし、患者様と医療機関の間の信頼を得るための手段であるべきものなのですが、逆に現場の医師の負担が倍増し、肝心の診察や診療行為が妨害され、コメディカルスタッフは書類や手続きがないと動けない、という硬直化を引き起こし、信頼失墜やミスを生み出し始めています。もう少しバランスのとれたシステムの構築が望まれます。

さて、研究面では未熟児における肝芽腫発生危険率の上昇のメカニズムにつき細々と実験しています。ラット新生児肝細胞の初代培養を必要とします。この系にて発ガンの研究を行い、また肝臓の発生、再生に関する知見も少しでも得たいと思います。肝細胞は生直後から10日間くらいでダイナミックに変身します。その際に外界から何らかの刺激を受けると、安定した成熟肝細胞よりも変調を来しやすいことは容易に想像されます。さて、巷で期待されている分子生物学の発展の医療への応用は、特に癌については案外難しいものになるでしょう。しかし例外的に小児癌では、発ガン物質など外界の刺激が少ない分、分子生物学的異常が絡んでいる可能性が高く、研究しがいのある分野と考えられます。助手の千年さんも、色々マスターしてくれています。最初のうちは緊急手術や病棟からの呼び出しで、しばしば実験を中断し、約束を反故にしました。ラットの出産のタイミングに数日分の予定を時間刻みで左右される実験ですので、予定調整に苦労しています。ようやくまともに実験出来そ

うな見通しがつき安堵しています。

教授が普段より仰るとおり、当教室も「生き残り」をかけて戦う時代を迎えています。特に小児外科という専門性の高い科を専攻する以上、年報や業績集を発行するような大病院にしか働く場は求められず、従って、それに寄与する能力を要求されます。そういった意味においても日常診療に満足するだけでなく、自分達の診療を、そして研究を世に問い、常に研鑽する姿勢を強く求められます。改めて自分に小児外科医としての資質があるかどうか、後輩の先生方に自分がどのような鏡になっているか、を問いかける毎日です。

最後に、この教室は働く「個人」を本当に大切にしてくださる教室だと思います。正直に、のびのびと働くことの出来るこの雰囲気、いつまでも保っていただきたいと念じつつ感謝しております。

「外科医と小児外科医」

岡邨香織

4月1日、一般外科での研修期間を終え、小児外科という新しい分野に足を踏み入れました。子供はもともと大好きで、学生時代は小児科への入局を考えていました。卒前の臨床実習で小児科と外科を回り、小児専門病院で小児外科でも実習をさせていただきました。結局、私の出身大学では一般外科で小児外科も経験できるという理由で、一般外科への入局を決めました。そして、今年。初めは大人と子供とのギャップに戸惑うことばかりで、ただ目の前のことだけで精一杯。子供の可愛らしさを味わう余裕も全くありませんでした。しかし1年間小児外科を経験して、今では本当に子供は可愛いものだとして1日に何度も実感しています。ところで、子供が救急病院をたらい回しにされ、悲しい結果になるというニュースが時々テレビでも取り上げられています。私自身も今まで、当直をしていて子供の腹痛の連絡があったときに小児科受診を勧め、診療を断ったことがありました。しかし、大人の腹痛なら診察できる一般外科医が、子供だからという理由で「診療」を断るのは恥ずかしいことだとは思っています。もちろん、小児専門の施設が存在するわけですから、そちらで専門の「治療」を受けていただくのが一番患者様の為であるのは言うまでもありません。ただ、まず診察をして、その上で、今すぐに専門施設に送る必要があるのか、今日は帰宅していただいて後日紹介するのが適切なのか、心配の要らないものなのかを判断し、ご家族にお話する義務は決して放棄してはいけないものだと思います。自分が小児外科を専門としていくか否かに関わらず、小児外科に関わりを持った以上、子供の診察を断ることは有り得ないし、あってはいけないことだということを出身大学の一般外科の医師たちに伝えていかなければならないと思っています。

子供の病気や怪我に対して、ご家族はほんの些細なことでも大変心配されます。そんなご家族に安心していただけるようにお話するというのは、とても難しいことです。同じ内容を同じようにお話しても、ご家族の受け取り方は本当に様々です。細かくメモを取りながら熱心に質問を投げかけてくるご両親もいらっしゃいました。先生にお任せしますとおっしゃったご両親もいらっしゃいました。子供は自分の病気について自分で質問をするということができません。小児を扱うということは、それと同じぐらい、時にはそれ以上にご両親と向き合うということなのです。たった1年で小児外科の何を勉強できたのかといわれるのももちろんその通りですが、そういうことに気がついたということも自分にとってはひとつの収穫だったと思っています。

貴重な経験をさせていただき、本当に感謝しています。ありがとうございました。

「自己紹介」

大谷祐之

押忍、僭越ながら自己紹介させていただきます。自分は獨協医科大学越谷病院小児外科助手、大谷祐之と申します。出身地は東京都、出身大学は東京医科大学、卒業は平成12年、現在4年目であります。卒後小児外科を志し、東京大学医学部外科研修ローテーションに学んだのち、都立広尾病院外科にて一般外科2年間修行に勤しみました。そして東京大学小児外科に入局、先の12月より当教室チームに加わり、池田教授、高安先輩、スタッフの諸先生方のもと、小児外科医療を御指導頂いているところであります。

自分は一般大学で少々寄り道をした分、医師となるまでに長い経緯があります。しかしそれは決して無駄な事ではなく、経験は確実に今の自分に活かされていると思うのであります。花の、否、いばらの医大生ライフ、体育会系部活動、外科研修医労働基準法、広尾救命病棟24時、そして忘れる事ないope ope ope！これら全てが非常に大切な経験で、その経験を糧に今の自分が創られ、息吹いているのだと思います。これからももっと貪欲に吸収し、もっと多次元に経験してゆきたいです。万年学習、万年鍛錬、万年青春！いつまでも掛け替えのない経験をエネルギーに、頑張り続けたいと思う所存であります。

小児外科の諸先生方、これからも御指導御鞭撻の程、賜れば幸いに存じます。以後、宜しくお願い申し上げます。押忍！

「麻酔科医と外科医」

木崎 義行

医師免許を取得し約2年経過し、小児外科の医局から麻酔科の医局へお世話になった。5ヶ月間の研修だったが、学生時代に抱いていた麻酔科の印象とは全く違った印象を持った。エキサイティングでスリリング、私が言うのは烏滸がましいが本当に患者様側に立った医療だと感じた。

5ヶ月間の研修中感じたことは、麻酔科医は、細心の注意を払い、石橋を叩いて渡るがごとく様々な場面を想定し様々な準備を行う。たとえ無駄となっても何も起こらなかったことを喜ぶ。手術の進行を見ながらその瞬間瞬間で処置を加える。痛みに対しても様々なアプローチを考え、施行し、最小限にとどめる。『緊急』手術の依頼を受ければ定時手術の間を(時には変更を)考え、一刻を争い入室させる。しかも外科系9科に対応しなければならない。

厚生労働省によると、病院勤務の麻酔科医師は5443人(3.5%)で、2年前の調査より128人増えている。しかし、現在でも麻酔専門医は不足していると言われている。日本の全手術症例で麻酔専門医が手術患者に立ち会うのは未だに半分と言われているし、ある県では大学医局が市立病院から麻酔科医を引き上げた。小児医療と並び麻酔科医不足も社会問題となっている。しかし、患者様の安全を守る麻酔科医の存在があって手術という行為が成り立っていることを外科医は忘れてはならないと思う。私が現在までに執刀した症例は176件、そのうち何例、患者様の全身状態を気遣いながら執刀しただろうか?(もちろん私がしなくても助手の先生は患者様を気遣い手術をリードしてくれていたのだが・・・)

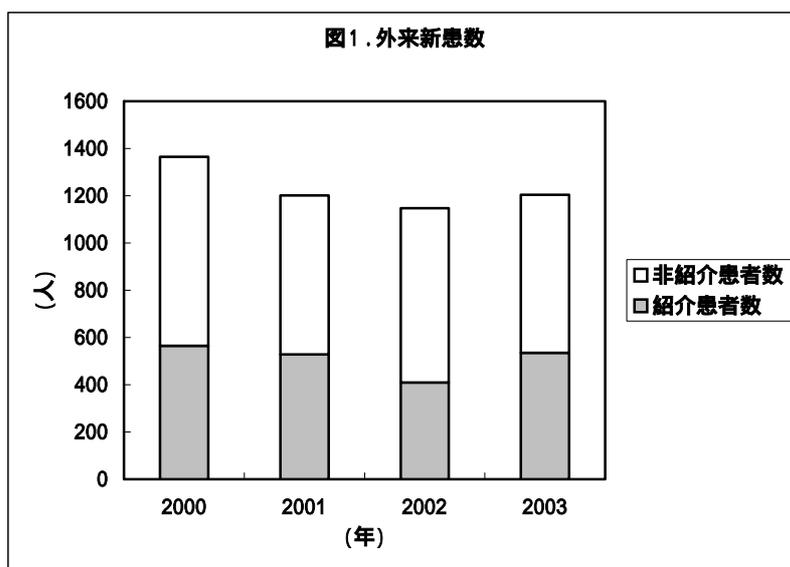
ある麻酔科の先生が『腕の良い外科医は周りすべてを納得させる。』と教えてくださった。まだまだ納得して頂ける手術が出来るようになるには努力も時間も経験も足りない。少しでも理想の手術が出来るよう、自分の診察、手技を見つめ直し、5月から成人外科を学びたいと考えている。ひとまず医者人生の最初の一区切りがつく。これまで私に関わってくれたすべての人に感謝したいと思う。

最後に5ヶ月間本当に温かい目でご指導頂いた奥田教授、麻酔科の先生方に深く感謝致します。ありがとうございました。

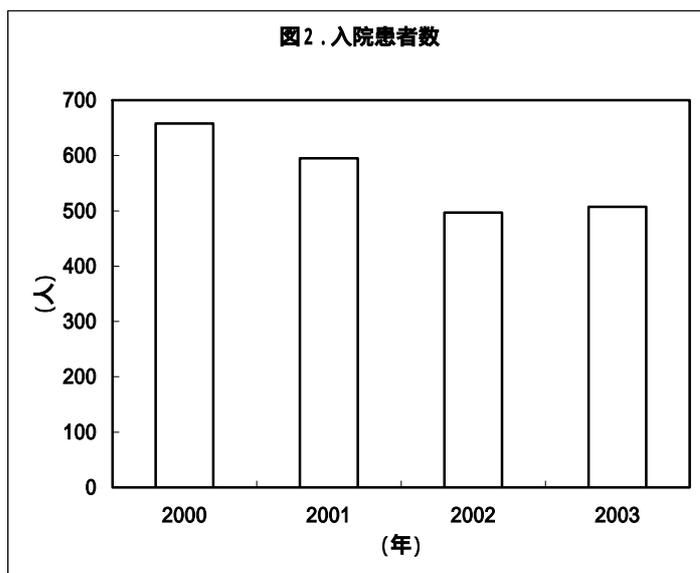
診療の集計

1. 外来および入院

2003年の外来延べ患者数は5064名、うち新患数は1204名でその紹介率は44.4%であった(図1)。

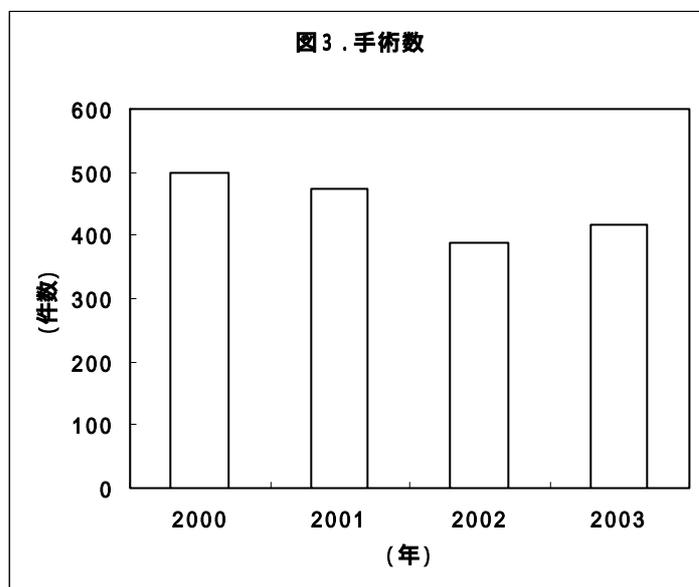


一方、2003年の入院患者数は507名、うち新生児入院数7名であった(図2)。



2. 手術

2003年の手術数は416件、うち新生児手術数は4件であった(図3)。



研究業績

1. 論文発表

「原著」

- 1) Fukuzawa R, Hata J, Hayashi Y, Ikeda H, Reeve AE. Beckwith-Wiedemann syndrome-associated hepatoblastoma: Wnt signal activation occurs later in tumorigenesis in patients with 11p15.5 uniparental disomy. *Pediatr Dev Pathol* 6:299-306,2003.
- 2) Kuroiwa M, Takeuchi T, Lee JH, Yoshizawa J, Hirato J, Kaneko S, Choi SH, Suzuki N, Ikeda H, Tsuchida Y. Continuous versus intermittent administration of human endostatin in xenografted human neuroblastoma. *J Pediatr Surg* 38:1499-1505,2003.
- 3) Nagata T, Takahashi Y, Ishii Y, Asai S, Nishida Y, Murata A, Koshinaga T, Fukuzawa M, Hamazaki M, Asami K, Ito E, Ikeda H, Takamatsu H, Koike K, Kikuta A, Kuroiwa M, Watanabe A, Kosaka Y, Fujita H, Miyake M, Mugishima H. Transcriptional profiling in hepatoblastomas using high-density oligonucleotide DNA array. *Cancer Genet Cytogenet* 145:152-160,2003.
- 4) Tsuchida Y, Ikeda H, Iehara T, Toyoda Y, Kawa K, Fukuzawa M. Neonatal neuroblastoma: Incidence and clinical outcome. *Med Pediatr Oncol* 40:391-404,2003.
- 5) Tsuchida Y, Shitara T, Kuroiwa M, Ikeda H. Current treatment and future directions in neuroblastoma. *Ind J Pediatr* 70:809-812,2003.
- 6) Ohira M, Morohashi A, Inuzuka H, Shishikura T, Kawamoto T, Kageyama H, Nakamura Y, Isogai E, Takayasu H, Sakiyama S, Suzuki Y, Sugano S, Goto T, Sato S, Nakagawara A. Expression profiling and characterization of 4200 genes cloned from primary neuroblastomas: Identification of 305 genes differentially expressed between favorable and unfavorable subsets. *Oncogene* 22:5525-5536,2003.
- 7) Inoue S, Tahara K, Sakuma Y, Hori T, Uchida H, Hakamada Y, Murakami T, Takahashi M, Kawarasaki H, Hashizume K, Kaneko M, Kobayashi E. Impact of graft length on surgical damage after intestinal transplantation in rats. *Transpl Immunol* 11:207-214,2003.
- 8) Mizuta K, Kobayashi E, Uchida H, Hishikawa S, Kawarasaki H. Increase of bile acid production by tacrolimus in the rat liver. *Transplant Proc* 35:437-438,2003.

「症例報告」

- 1) Tanaka S, Ikeda H, Kuroiwa M, Takahashi A, Suzuki N, Tsuchida Y, Kuwano H. Thoracoscopic bilateral wedge resections of the lung in a child with hepatoblastoma. *Pediatr Endosurg Innov Tech* 7:175-179,2003.
- 2) 木崎義行、石丸由紀、岡邨香織、藤野順子、高安 肇、池田 均、田中喜展、好本裕平：VP シャントによる腹腔内仮性嚢胞を原因とするイレウスの1例。第92回東京小児外科

研究会抄録集 32:47-49,2003.

- 3) 木崎義行、内田広夫、藤野順子、山本英輝、石丸由紀、池田 均、森 吉臣：回腸重複症に併発した回腸リンパ管腫の1例。日小外会誌 39:636-638,2003.

「著書・総説・その他」

- 1) 池田 均：横紋筋肉腫の病期分類と外科治療ガイドライン。小児外科 35:45-50,2003.
- 2) 池田 均、石丸由紀、内田広夫：低出生体重児の肝芽腫とその発生機序：酸素曝露と肝細胞のDNA酸化障害。小児外科 35:556-561,2003.
- 3) 池田 均：鼠径ヘルニア、精巣・精索水腫、停留精巣、臍ヘルニア。小児科診療 66:1537-1543,2003.
- 4) 池田 均：「腸間膜嚢胞・大網嚢胞」、小児消化器肝臓病マニュアル(白木和夫監修、藤澤知雄、友政 剛、編集)、診断と治療社、東京、2003、pp195-196.
- 5) 池田 均：「その他の消化管腫瘍：胃奇形腫、悪性リンパ腫、平滑筋肉腫、上皮性癌腫」、小児消化器肝臓病マニュアル(白木和夫監修、藤澤知雄、友政 剛、編集)、診断と治療社、東京、2003、pp196-198.
- 6) 池田 均：「悪性肝腫瘍」、小児消化器肝臓病マニュアル(白木和夫監修、藤澤知雄、友政 剛、編集)、診断と治療社、東京、2003、pp311-313.
- 7) 池田 均：「良性肝腫瘍」、小児消化器肝臓病マニュアル(白木和夫監修、藤澤知雄、友政 剛、編集)、診断と治療社、東京、2003、pp313.
- 8) 高安 肇：肝芽腫と β -カテニン異常。小児外科 35:522-527,2003.
- 9) 高安 肇：「中心静脈ラインの管理」、小児科研修医ノート(五十嵐隆、渡辺 博、田原卓浩、編集)、診断と治療社、東京、2003、pp342-344.

2. 学会・研究会への参加

「口演発表」

- 1) 山本英輝、木崎義行、藤野順子、石丸由紀、内田広夫、池田 均：小児急性虫垂炎に対する腹腔鏡下虫垂切除術：当院における手術適応、手技および工夫。第7回群馬県内視鏡外科研究会、2003.1.11、前橋
- 2) 石丸由紀、内田広夫、池田 均：ラット肝細胞におけるDNA酸化障害とSOD活性の検討。日本小児肝臓スタディグループ(JPLT)研究会、2003.1.17、東京
- 3) 設楽利二、嶋田 明、鈴木 信、坂元 純、黒岩 実、鈴木則夫、土田嘉昭、池田 均：肝芽腫再発例に対する造血幹細胞移植の検討 - 自験例および本邦における報告の分析

- 。日本小児肝癌スタディグループ(JPLT)研究会、2003.1.17、東京
- 4) 山本英輝、藤野順子、木崎義行、石丸由紀、内田広夫、池田 均：急性虫垂炎による汎発性腹膜炎に対する腹腔鏡下虫垂切除術の有用性。第11回クリニカル・ビデオフォーラム(CVF)、2003.1.25、東京
 - 5) 内田広夫、木崎義行、山本英輝、藤野順子、石丸由紀、田口智章、池田 均：Megarectumをともなう全結腸 hypoganglionosis の1例。第33回日本小児消化管機能研究会、2003.2.15、加賀
 - 6) 山本英輝、藤野順子、木崎義行、石丸由紀、内田広夫、池田 均、桑野博行：治療開始後4ヶ月で再発した左ウィルムス腫瘍の1例。第6回群馬小児がん研究会、2003.2.19、前橋
 - 7) 木崎義行、内田広夫、山本英輝、藤野順子、石丸由紀、池田 均：小児大腿ヘルニアの治療経験。第40回埼玉県医学会総会、2003.2.23、さいたま
 - 8) 山本英輝、藤野順子、木崎義行、石丸由紀、内田広夫、池田 均：治療開始後4ヶ月で再発した左ウィルムス腫瘍の1例。平成14年度関東甲信越地区小児がん登録研究会、2003.3.8、東京
 - 9) 木崎義行、内田広夫、山本英輝、藤野順子、石丸由紀、池田 均：Megarectumをともなう全結腸 hypoganglionosis の1例。第11回関東小児外科症例検討会、2003.3.29、東京
 - 10) Ishimaru Y, Uchida H, Ikeda H. Oxygen-causing oxidative DNA damage and antioxidant enzyme activity in rat liver cells. The 40th Meeting of the Japanese Society of Pediatric Surgeons, May 28-30,2003, Kyoto
 - 11) Uchida H, Ikeda H, Kobayashi E. Optimization of the therapeutic protocol for deoxyspergualin according to dosing time-dependent differences in toxicity and efficacy. The 40th Meeting of the Japanese Society of Pediatric Surgeons, May 28-30,2003, Kyoto
 - 12) 木崎義行、石丸由紀、内田広夫、山本英輝、藤野順子、池田 均：急性陰嚢症の臨床的検討。第40回日本小児外科学会総会、2003.5.28-30、京都
 - 13) 山本英輝、内田広夫、石丸由紀、藤野順子、木崎義行、池田 均：急性虫垂炎による汎発性腹膜炎に対する腹腔鏡下虫垂切除術。第40回日本小児外科学会総会、2003.5.28-30、京都
 - 14) 鈴木 信、鈴木則夫、坂元 純、黒岩 実、池田 均、高橋 篤、土田嘉昭：当センターにおける non-palpable testis の診断と治療方針。第40回日本小児外科学会総会、2003.5.28-30、京都
 - 15) 土田嘉昭、牧野駿一、池田 均、黒岩 実：小児固形悪性腫瘍の治療成績向上のために：

- 基礎研究から臨床研究へ。第 103 回日本外科学会総会基調講演、2003.6.4-6、札幌
- 16) 木崎義行、石丸由紀、高安 肇、岡邨香織、池田 均：VP シャントによる腹腔内仮性嚢胞を原因とするイレウスの 1 例。第 92 回東京小児外科研究会、2003.6.17、東京
 - 17) 池田 均、内田広夫、石丸由紀、山本英輝、藤野順子、木崎義行：ワークショップ「急性虫垂炎の診断と治療のガイドライン」、小児急性虫垂炎の今日的な診断と治療について。第 17 回日本小児救急医学会、2003.6.21-22、さいたま
 - 18) 岡邨香織、木崎義行、石丸由紀、高安 肇、池田 均：治療開始後 4 ヶ月で再発した左ウィルムス腫瘍の 1 例。第 15 回栃木県小児がん研究会、2003.7.5、壬生
 - 19) 木崎義行、石丸由紀、岡邨香織、藤野順子、高安 肇、池田 均、山井庸扶、長尾光修：気管支鏡下に摘出しえた気管支内異物の 2 例。第 30 回日本内視鏡研究会、2003.7.5、横浜
 - 20) 毛利武弘、高木雄一、石丸由紀、池田 均、齋藤光弘：小児患者に対する薬袋を用いた薬剤情報提供の評価と保護者のニーズ。日本病院薬剤師会関東ブロック第 33 回学術大会、2003.8.30-31、新潟
 - 21) 岡邨香織、木崎義行、石丸由紀、高安 肇、池田 均：腸軸捻転による腸閉塞症で発症した回腸腸間膜嚢胞の 1 例。第 790 回外科集談会、2003.9.6、東京
 - 22) Takayasu H, Kanamori Y, Sugiyama M, Tomonaga T, Egami S, Suzuki K, Hashizume H. Prenatally diagnosed ovarian cysts: Prenatal diagnosis, management and postnatal outcome. The 6th World Congress of Perinatal Medicine, September 13-16,2003, Osaka
 - 23) Maruyama K, Koizumi T, Miyazaki M, Fujiu T, Yoshizawa Y, Takahashi Y, Ikeda H. Hepatoblastoma in very low birth weight infants: A result of a survey by the Japan Society for Premature and Newborn Medicine. The 6th World Congress of Perinatal Medicine, September 13-16,2003, Osaka
 - 24) 岡邨香織、石丸由紀、木崎義行、高安 肇、池田 均：自然軽快した気管支狭窄病変の 1 例。第 12 回関東小児外科症例検討会、2003.9.20、東京
 - 25) 谷村雅子、河 敬世、林 富、松井一郎、池田 均：極低出生体重児の生存率の向上と肝芽腫リスクの上昇。第 62 回日本癌学会、2003.9.25-27、名古屋
 - 26) 高安 肇、木崎義行、石丸由紀、岡邨香織、池田 均：2 カ月時より症状を有した嚢腫型胆道拡張症 1 歳女兒の一例。第 26 回日本膵管胆道合流異常研究会、2003.9.27、久留米
 - 27) 毛利武弘、高木雄一、石丸由紀、齋藤光弘、池田 均：小児の家庭における服薬上の問題への取り組み。第 14 回日本小児外科 QOL 研究会、2003.10.11、香川
 - 28) 中島明子、浅生弥生、鈴木淑子、飯沼栄子、村杉佳代、山本悦子、山浦由美子、芦野道

- 子、福田裕美、佐藤澄子：間欠的自己導尿指導における問題および改善点の検討。第14回日本小児外科 QOL 研究会、2003.10.11、香川
- 29) 木崎義行、石丸由紀、岡邨香織、高安 肇、池田 均：新生児腸間膜奇形腫の1例。第38回日本小児外科学会関東甲信越地方会、2003.10.25、千葉
- 30) 高安 肇、岡邨香織、木崎義行、石丸由紀、中井秀郎、池田 均：筋緊張性ジストロフィーおよび脳性麻痺に合併した xanthogranulomatous pyelonephritis(XGP)の1例。第38回日本小児外科学会関東甲信越地方会、2003.10.25、千葉
- 31) 高安 肇、岡邨香織、木崎義行、石丸由紀、中井秀郎、池田 均：筋緊張性ジストロフィーおよび脳性麻痺に合併した xanthogranulomatous pyelonephritis(XGP)の1例。第37回埼玉県小児外科症例検討会、2003.11.6、さいたま
- 32) 石丸由紀、木崎義行、岡邨香織、藤野順子、高安 肇、池田 均、星本和種、濱田佳伸、矢追正幸、堀中俊孝、林 雅敏、大蔵健義、富田祐造、小幡一夫、永井敏郎：出生前診断及び母体搬送された新生児外科症例の検討。第5回越谷市医師会学術集会、2003.11.8、越谷
- 33) 石丸由紀、木崎義行、岡邨香織、高安 肇、池田 均：異物が疑われた気管支内病変の1例。第14回日本小児呼吸器外科研究会、2003.11.20-22、兵庫
- 34) 高安 肇、木崎義行、石丸由紀、岡邨香織、池田 均：Morgagni ヘルニアに対する腹腔鏡下根治術(Azzie 法)の経験。第23回日本小児外科手術手技・内視鏡手術研究会、2003.11.20-22、兵庫
- 35) 石丸由紀、木崎義行、岡邨香織、高安 肇、池田 均：卵巣原発卵黄嚢癌4例の検討。第19回日本小児がん学会、2003.11.27-28、東京
- 36) 岡邨香織、木崎義行、石丸由紀、高安 肇、池田 均、黒岩 実、鈴木則夫、嶋田 明、設楽利二、土田嘉昭：ウィルムス腫瘍再発2症例の治療経験。第19回日本小児がん学会、2003.11.27-28、東京
- 37) 高安 肇、内田広夫、石丸由紀、岡邨香織、木崎義行、池田 均：肝芽腫発生における Wnt シグナル異常。第31回獨協医学会、2003.12.6、壬生
- 38) 岡邨香織、石丸由紀、木崎義行、高安 肇、池田 均：気管支異物を疑わせた気管支狭窄病変の1例。第93回東京小児外科研究会、2003.12.9、東京

「症例提示」

- 1) 高安 肇：症例呈示(14歳、女兒、左腎腫瘤)、第49回川口フィルムカンファレンス、2003.5.1、川口
- 2) 木崎義行：症例提示(5カ月、男児、舌血管腫)、第36回埼玉県小児外科症例検討会、

2003.5.20、さいたま

- 3) 木崎義行：症例呈示（1歳、女児、先天性胆道拡張症）、第50回川口フィルムカンファレンス、2003.6.5、川口
- 4) 岡邨香織：症例呈示（3歳、男児、頸部および縦隔リンパ管腫）、第12回関東小児外科症例検討会、2003.9.20、東京

「座長・当番幹事」

- 1) 池田 均：日本小児肝癌スタディグループ(JPLT)研究会、「低出生体重児・併存症」座長、2003.1.17、東京
- 2) 池田 均：第36回埼玉県小児外科症例検討会当番幹事、2003.5.20、さいたま
- 3) 池田 均：第40回日本小児外科学会総会一般演題「その他」座長、2003.5.30、京都
- 4) 池田 均：第17回日本小児救急医学会一般演題「新生児仮死」座長、2003.6.22、さいたま
- 5) 池田 均：第14回日本小児外科QOL研究会「医療情報とQOL」座長、2003.10.11、香川
- 6) 池田 均：第19回日本小児がん学会示説「肝」座長、2003.11.28、東京
- 7) 池田 均：第31回獨協医学会「一般演題(5)：がん」、2003.12.6、壬生

3. 研究助成

- 1) 平成14年度文部科学省がん研究に関わる特定領域研究、「低出生児の肝芽腫リスクの要因解析」(分担研究者、池田 均)、助成額1,200,000円
- 2) 平成14年度科学研究費基盤研究(B)、「治療過程管理を導入した小児横紋筋肉腫に対する新しいグループスタディの展開」(分担研究者、池田 均)、助成額200,000円
- 3) 平成15年度科学研究費基盤研究(C)、「低出生体重児における肝芽腫発生の機序に関する研究」(研究代表者、池田 均)、助成額1,400,000円
- 4) 平成15年度獨協医科大学研究助成、「ラットの肝細胞を用いた肝悪性腫瘍の発生機序の解明のための実験」(研究代表者、石丸由紀)、助成額1,000,000円
- 5) 平成15年度獨協医学会と共催する会の補助、「第17回小児外科・周産期外科セミナー」、補助額100,000円

4. 学位 該当者なし

教育関連の活動

1. 学生実習

昨年と同様、医学部5年生を対象とした Bedside Learning(BSL)を担当した。平成15年度の越谷病院におけるBSLが小児外科のみになったことにもない、4月1日からは毎週、BSLの学生と診療をともにすることになった。従来どおり、診療参加型のBSLを実施すると大学の方針に従い、学生は朝8時30分のミーティングから診療終了時刻まで担当医とともに病歴聴取、診察、検査、手術(術前準備から術後管理まで)、診療記録の記載などの基本とその実際を学んだ。したがって班によっては夜間の緊急手術に立ち会い、帰宅が深夜になった班もあった。また回診、カンファレンス、症例検討会、セミナーなどを通じ小児外科疾患の病態、診断、治療に関する基本的知識が得られるよう、さらにチーム医療の実際を体験できるよう配慮した。学生には個別にテーマを与え、学習した内容を短時間でプレゼンテーションする機会を与えた。

また、医療人としての品位ある言動やチーム医療の一員としての生命、人格に対する尊厳、自然科学としての医学に対する真摯な探究心なども重要な点として指導の際に配慮した。学生は真面目で年々、おとなしくなる傾向があり、しばしば実習への積極的な参加を促すこともあった。実習の総括と評価は池田が行った。

2. 講演・講義

- 1) 池田 均：「小児悪性固形腫瘍の分子病態とグループ研究」、群馬大学医学部同窓会推薦講演、2003.1.31、前橋
- 2) 池田 均：「外科的小児救急疾患の診断と初期治療について」、越谷市夜間急患診療所講演、2003.2.13、越谷
- 3) 池田 均：「小児外科領域のGERD」、獨協医科大学越谷病院消化器内科講演、2003.3.4、越谷
- 4) 高安 肇：「肝芽腫におけるWntシグナルの異常について」、横浜市立大学臓器再生医学講座講演、2003.5.28、横浜
- 5) 池田 均：「小児悪性固形腫瘍の分子病態と治療」、群馬大学医学部平成15年度実践臨床病態学講義(6年生)、2003.9.18、前橋

3. セミナーの開催

小児外科および関連領域の最新の情報を得ることを目的に、院内外の医師、看護師、コメディカル、学生を対象に小児外科・周産期外科セミナーを開催した。実施セミナーは以下の

とおりである。

尚、第 17 回小児外科・周産期外科セミナーは獨協医学会の補助を得て獨協医学会との共催で開催された(研究助成の頁を参照)。

- 1) 第 12 回小児外科・周産期外科セミナー
講師：社会保険船橋中央病院形成外科、蓮見俊彰先生
演題：「形成外科について」
2003.1.14、獨協医科大学越谷病院
- 2) 第 13 回小児外科・周産期外科セミナー
講師：千葉県がんセンター生化学研究部、中川原章先生
演題：「肝芽腫および神経芽腫 cDNA プロジェクトから得られたもの」
2003.1.28、獨協医科大学越谷病院
- 3) 第 14 回小児外科・周産期外科セミナー
講師：獨協医科大学越谷病院泌尿器科、中井秀郎先生
演題：「先天性水腎症および原発性 VUR の診断治療方法についての要点整理」
2003.6.13、獨協医科大学越谷病院
- 4) 第 15 回小児外科・周産期外科セミナー
講師：都立清瀬小児病院外科、林 奂先生
演題：「直腸肛門奇形の発生と分類」
2003.7.22、獨協医科大学越谷病院
- 5) 第 16 回小児外科・周産期外科セミナー
講師：群馬県立小児医療センター外科、黒岩 実先生
演題：「小児における内視鏡手術とその工夫 - 群馬県立小児医療センターでの経験」
2003.10.7、獨協医科大学越谷病院
- 6) 第 17 回小児外科・周産期外科セミナー(獨協医学会共催)
講師：香川大学小児外科、渡辺泰宏先生
演題：「膵・胆管合流異常と胆道拡張症」
2003.11.7、獨協医科大学越谷病院

4. 小児外科・病理カンファレンス

小児外科と病理のカンファレンスを随時、開催した。

- 1) 第 9 回小児外科・病理カンファレンス、2003.7.1
 - (1) 14 日、男児、腹腔内腫瘍、腸間膜原発成熟型奇形腫
 - (2) 22 歳、男性、ヒルシュスブルグ病

- (3) 14 歳、女兒、黄色肉芽腫性腎盂腎炎
- (4) 2 歳、女兒、先天性胆道拡張症
- (5) 1 歳、女兒、先天性胆道拡張症
- 2) 第 10 回小児外科・病理カンファレンス、2003.11.25
 - (1) 7 歳、男児、腸間膜嚢胞、重複腸管様構造
 - (2) 1 カ月、男児、腸間膜嚢胞、腸間膜リンパ管腫
 - (3) 3 歳、女兒、先天性胆道拡張症
 - (4) 7 歳、女兒、腋窩リンパ節腫大、肉芽腫性リンパ節炎
 - (5) 17 歳、男性、胆嚢腺筋症
 - (6) 1 カ月、女兒、胆道閉鎖症

5. 抄読会

2003 年は 30 回(抄読論文数 67)の抄読会を行った。

その他

「寄稿」

- 1) 池田 均：「直言：小児がん集団検査の再考を」。2003.5.14、朝日新聞朝刊
- 2) 池田 均：「国家的事業としての神経芽腫マス・スクリーニング」。埼玉県医師会誌、638:40-41,2003.
- 3) 池田 均：「貴方も名医：先天性胆道拡張症」。Clinic magazine、2003年10月号、pp44-45,80-81.
- 4) 池田 均：「あとがき」。日小外会誌、39(5),2003.
- 5) 池田 均：「あとがき」。日小外会誌、39(6),2003.
- 6) 池田 均：「あとがき」。日小外会誌、39(7),2003.

編集後記

立春を過ぎた頃、片山津を訪れた。夜の会合まで時間があつたので、湖の見える露天風呂に浸かって疲れを癒した。空は淡く、眼前に広がる湖は広く穏やかで、見渡すすべてのものが飾られた舞台のように思える。全身から力が抜け、開放感と多幸感で思わず笑みがこぼれた。秋には琴平温泉を訪れた。岡山から特急「南風」で瀬戸大橋を渡り香川に入ると、遠く忘れかけていた心の原風景と再会した気がした。窓外を過ぎ行く山の端はやはり淡いパステル色の空気に包まれている。駅を降りると後ろから大声で声をかけられた。振り返ると年配の女性が扉から身を乗り出して、車内に忘れた手帳を投げ渡してくれた。久しぶりの人の親切を心からありがたく思い、四国の地に暖かい安堵を覚えた。

日常の多忙は、己の心の原点を見つめなおすことをさえ忘れさせてしまう。多くの子どもたちやその家族の幸せを願い、そのことを喜びとしてきたはずである。もっとゆっくりした歩みでもよいのではないだろうか。旅の休息はそんな思いをあらためて感じさせた。

(池田)

獨協医科大学越谷病院小児外科のあゆみ 2003 年

平成 16 年 3 月 31 日発行

編集・発行 獨協医科大学越谷病院小児外科
〒343-8555 埼玉県越谷市南越谷 2-1-50
TEL 048-965-1111(内線 2600)

印刷所 (株)松井ピ・テ・オ・印刷
TEL 028-662-2511(代)
